



© Yuki Nakase

夕日が差し込む田舎町のホットドッグ屋さん

アメリカと引き換えに失うもの

一つのことを選択するということは、それは同時にほかの何かを失うことなのかもしれません。たとえば、日本人の私はアメリカでの新しい経験と出会いと引き換えに、日本での時間を失っています。今の年齢になるまではあれもこれもすべてを得たいと欲張りでしたが、自分の長所と短所や過去の決断などを客観的に見据えることにより、以前よりも標的が狭くなってきたような気がします。照明業務を通じて演出家や同業者、仲間と通じ合うこと、そして周囲の人達に私の照明で喜んでもらいたい一心で生きているような気がします。もちろん、毎回の仕事で手応えを得られるわけではありませんが、だからこそ、同じ視点でものを捉えている人との繋がりに心が震えると同時に、異なる視点をもつ人から学ぶ機会を有り難く感じます。

日本にいた頃、アメリカの照明業界が世界の中で一番興味深く感じました。その理由を探りたいという好奇心が私の渡米を促したのは確かです。当たり前ですが、アメリカの照明デザインにも良いものやそうでないものがあり、そしてアメリカ産業に洗脳され続けて育った日本という国の社会的背景が私の人生の選択に大きく影響していたことに気がついたのは、渡米して1年ほどたった頃です。幼い頃、人生で初めて観たミュージカルは『キャッツ』、そして映画『コーラスライン』を繰り返し観て憧れた私が、ニューヨークを行き先に選んだのは今から思うと自然な流れでした。しかし、「隣の芝生は青い」と感じるのは日本人の私だけではないようです。憧れのニューヨークで仕事をして仲間が増えることによって少しずつ見えてきたことは、ニューヨークのクリエイターの多くがヨーロッパを見上げて、ヨーロッパに渡って仕事することを誇りに思っていることです。理由はヨーロッパ諸国の文化に対する関わり方とその長い歴史が挙げられます。国の援助でもって制作された質の高いヨーロッパ

の作品がブロードウェイで発表されるたび、ニューヨークのデザイナー仲間からは嘆きの声を聞きます。

「芸術は文化が混ざり合うところで生まれる」と聞いたことがあります。「世界のへそ」と言われたデルフィが位置するギリシャで舞台芸術が生まれた紀元前500年頃から、その方程式は存在していたようです。芸術家が第二次世界大戦の戦火を逃れて活動の場をニューヨークに移したことにより、戦後、ニューヨークが芸術の都となった必然は無視できませんが、個人的な視点から感じることは、外国人であるという存在、マイノリティに身を置くことが作品に大きく影響するように感じます。他者から認められず関わりをもてないことがスタート地点なので、自分の意見や存在を尊重されない場面への恐れが緩和し、そして他者が送るサインを理解しようとする集中力が身につくのが利点かもしれません。なにより、言葉が不自由なことによって五感が研ぎ澄まされていき、孤独が作品に意識を集中させるでしょう。

私自身は芸術家ではなくデザイナーであり、芸術家の作品をサポートする立場です。したがって、上記の外国人である利点が最大限に活かせる立場ではないかもしれません。ただ、外国人としてニューヨークがとても仕事しやすい場所であることは自覚しています。きっとそれは、ニューヨークに集まりここを拠点に仕事するクリエイターそれぞれが、人生のもたらす痛みをそと秘めていて、負のエネルギーを原動力としていることに共通するからかもしれません。自分の渡米に対する決断と選択を代償に失うことについては悔いても意味がなく、時間や場所だけがもたらす関わりを超えた心のつながりを信じ、今を精一杯生きるしかない、と身を引き締める思いです。